

## 第6回生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会 議事要旨

日時：平成24年5月2日（水）13:00～14:20

場所：福岡市役所15階 1503会議室

出席委員：

浅野委員	福岡大学法学部 ※委員長
荒井秋晴	九州歯科大学
小野委員	日本野鳥の会福岡
川口委員	九州大学大学院農学研究院資源生物科学部門
佐々木委員	NPO法人アジアン・エイジング・ビジネスセンター
志賀委員	NPO法人グリーンシティ福岡
薛 委員	九州大学大学院農学研究院環境農学部門
服部委員	NPO法人ふくおか湿地保全研究会
森 委員	国立水俣病総合研究センター国際・総合研究部自然科学室
矢原委員	九州大学大学院理学研究院生物化学部門
矢部委員	九州大学大学院農学研究院農業資源経済学部門
横山委員	九州産業大学商学部観光産業学科

※敬称略

議事：

1. 生物多様性ふくおか戦略（仮称）素案に対する意見と対応について
2. 今後のスケジュールについて
3. その他

配布資料：

資料1-1	生物多様性ふくおか戦略（仮称）素案に対する市民意見募集の実施及び意見への対応・考え方について
資料1-2	生物多様性ふくおか戦略（仮称）素案に対する意見と対応・考え方（案）
資料1-3	生物多様性ふくおか戦略（仮称）案
資料2	生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定スケジュール
参考資料1	生物多様性ふくおか戦略（仮称）検討委員会設置要綱
参考資料2	生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会 委員名簿
参考資料3	第5回生物多様性ふくおか戦略（仮称）策定検討委員会議事録
参考資料4	（パブリックコメント用）生物多様性ふくおか戦略（仮称）概要版

## 1. 生物多様性ふくおか戦略（仮称）素案に対する意見と対応について

※事務局より、生物多様性ふくおか戦略（仮称）素案に対する市民意見募集の実施及び意見への対応・考え方について（資料 1-1）、生物多様性ふくおか戦略（仮称）素案に対する意見と対応・考え方（案）（資料 1-2）に基づき説明があった。

（矢原委員）

- ・資料 1-2 の「反映の有無」の項目について、「原案どおり」という対応が多すぎる印象がある。
- ・パブリックコメントを実施し、たくさんの方から寄せられたご意見であるため、参加意識をより高めてもらうためにも、何らかの形で意見を反映したほうがよいと思う。

（事務局）

- ・今回のパブリックコメントにおいて、わかりやすさや用語の説明を求めるご意見が多かった。
- ・そのため、戦略策定後の取り組みとして、「生物多様性」に関する分かりやすい資料をつくるなど、理解を深めることで対処したいと考えている。

（矢原委員）

- ・例えば、資料 1-2 の 1 つ目のご意見に「福岡市の固有の自然について付け加えてほしい」とあるが、このご意見に対応するため、固有の自然について一言でもよいので具体的に書き加えられるとよいと思う。
- ・「原案どおり」と対応すると、意見を聞き入れてもらえない印象を市民に与えてしまう。例えば、ラムサール条約への登録検討など、本戦略の基本方針に関わる部分を変更することはできないだろうが、市民の意見を少しでも取り入れていることを示すためにも、何らかの対応を示したほうがよいと思う。

（事務局）

- ・対応できる部分はできる限り対処していく。
- ・解説が必要な用語があるため、本委員会には間に合わなかったが、用語の注釈を加えるか用語解説集を作成する予定である。

（浅野委員長）

- ・資料 1-2 の表の「反映の有無」という項目については、いただいたご意見に対して、ただ「原案どおり」とするだけでなく、資料編にあることや今後の実施にあたって参考とする等、表現をもう一工夫すること。
- ・どのような対応をしたかがわかる「ご意見への対応」という項目に変更するとよい。

（事務局）

- ・具体的な対応は、「市の考え方（案）」として示しているため、この考え方を踏まえながら、どのような対応表現とするかを検討する。

（浅野委員長）

- ・本委員会でお出された意見を踏まえて修正したパブリックコメントの対応については、修正内容を委員長に一任していただき、当委員会です承を得たものとする。

## ※生物多様性ふくおか戦略（仮称）案について

（浅野委員長）

- ・本委員会は、今回が最後であるから、再度、本戦略全体についてのご意見をうかがいたい。

(佐々木委員)

- ・パブリックコメントにいただいたご意見にも出されていたように、本戦略の概要版が市民の目に最もふれると考える。
- ・概要版にも、本編と同様にコンテンツ（目次）が必要であると考えます。

(事務局)

- ・本委員会で示している参考資料4の概要版は、あくまでもパブリックコメント用に作成したものであり、今後は、よりわかりやすいパンフレットとして作成する予定である。
- ・内容量としては、気軽に読まれることができるように8ページ程度を想定している。

(矢原委員)

- ・平成22年に合意されたCOP10の愛知目標を受け、その達成に向けて現在、生物多様性国家戦略を改定している。しかし、本戦略において、「愛知目標」についての内容が、簡単にしか触れられていない。
- ・なお、「生物多様性国家戦略2010」は、COP10の開催までに策定した背景がある。

(浅野委員)

- ・「生物多様性国家戦略2010」は、新たな戦略が改定されて策定されるまでの期間の計画であり、寿命が短い。
- ・本戦略は長期目標を100年後としていることから、2050年を目標としている愛知目標を本戦略に組み込むため、資料1-3の戦略本編p5に愛知目標についての説明を示し、p9「戦略の位置づけ」に加えることはできないかと考える。
- ・戦略本編の中で、「生物多様性国家戦略2010」と示しているが、この「2010」を削除することで、生物多様性基本法に基づいた国家戦略を指すこととなり、戦略の期間を気にする必要がなくなると思う。
- ・例えば目標年次を100年後とすることを第3次国家戦略で示しているなど、「生物多様性国家戦略」という表現でも整合性が取れなくなることはない。

(事務局)

- ・ご指摘を踏まえ、「2010」を削除する。

(荒井委員)

- ・資料1-3の戦略本編p4に、「その場所での進化」とあるが、「進化」というとかなり長い時間スケールをイメージしてしまい、ここで示されている時間スケールとの違和感を覚える。例えば、「順応」という表現に変更してはいかがか。
- ・また、同頁に「生息できる場所への移動」とあるが、10年程度の時間スケールでこの表現は適当であるのかうかがいたい。

(矢原委員)

- ・「進化」が10年スケールで起こることは多くの事例でわかっていることから、「その場所での進化」という表現で適当である。
- ・例えば、気候変動による予測モデルを検討している中では、この短いスパンでの「進化」も考慮していく必要があるといわれている。
- ・また、「移動」についても、動物はもちろん該当するが、例えばブナなどの植物も、更新する過程でよ

り生育環境に適した場所へ移動するといわれている。

- ・例えば、アカガシなど常緑樹の繁茂によって植生の更新が妨げられるなど、「進化」や「移動」よりも生物同士の関係のほうが圧力が大きいと思う。

(荒井委員)

- ・資料 1-3 の戦略本編 p 19 に「森厳」という表現があるが、この言葉は一般的に用いられるものであるのかうかがいたい。

(浅野委員長)

- ・福岡市の背振山や金山を記述している箇所について「森厳」という表現は大げさすぎる印象がある。白神山地や寺社境内地などの森林に用いられる言葉ではないのかと思う。

(事務局)

- ・出典等を確認して、わかりやすい用語とする。

(志賀委員)

- ・これまでの委員会でも「生物多様性地域連携促進法」について述べてきたが、同法令が平成 23 年 10 月に施行され、同じタイミングで本戦略が策定されるため、NPO や市民活動団体等と連携して合同のテーブルを設ける旨等を盛り込むことを検討されているのかうかがいたい。

(浅野委員長)

- ・その法令の考え方は、資料 1-3 の戦略本編 p 41 「多様な主体による会議」に盛り込まれていると認識している。
- ・今後、環境局内の環境教育や生物多様性に関する各種会議を行う場合、考え方や取り組みが重複する部分があるため、どのように整理していくかを考える必要があると思う。
- ・生物多様性に関する会議を行う場合、環境教育や自然観察などに特化するのではなく、農業、漁業などの産業的な要素を加えて、市民とのつながりをより深めていくことが必要であると思う。
- ・環境において、産業分野の人と手を組むことができる可能性は、「生物多様性」では大きいと考える。
- ・法制度との関係は、自治体が考えていくべきである。

(事務局)

- ・多様な主体との連携については、資料 1-3 の戦略本編 p 39 「多様な主体との連携」において、事業者、市民、NPO 等を含めた協議・情報集約の場となるプラットフォームの考え方を示している。

(浅野委員長)

- ・他都市においても、生物多様性をキーワードにした各主体のネットワークづくりは十分でない。
- ・事業者は生物多様性には関心があるものの、何をしたらいいのか分からないと言っている。

(横山委員)

- ・資料 1-3 の戦略本編 p 20 の「多自然川づくり」とあるが、地域の自然に近づける施工であるならば、「近自然」という表現のほうが適当ではないか。

(矢原委員)

- ・国土交通省は、河川整備の方針として、平成 2 年から「多自然型川づくり」を全国に提唱したが、人工的な整備やその場所の自然環境を踏まえない施工も一部で見られた。そのため、その課題と反省を踏まえ、平成 18 年には、工法にとらわれず、地域特性に合わせ、生物多様性にも配慮した「多自然川づくり」

を基本指針として示している。

- ・多自然川づくりとは、近自然よりも自然に近づこうとする河川整備であると認識している。

(浅野委員長)

- ・今後は、本戦略や生物多様性を市民にわかりやすく説明するためのパンフレットづくりが大きな課題になってくるため、委員の皆様にはアドバイス等をいただきたいと思う。
- ・パンフレットについては、できるだけ頁数を少なくし、本当にアピールしたい部分を強調するほうがよいと思う。
- ・できれば、学校の先生や事業関係者が本編を読みたくなるような構成になるとよいと思う。

## 2. 生物多様性ふくおか戦略（仮称）素案に対する意見と対応について

※事務局より、生物多様性ふくおか戦略（仮称）スケジュール（資料2）に基づき説明があった。

(浅野委員長)

- ・本戦略策定後に予定している「指標の検討」については、かなり専門性を要するものであるため、本委員会を再び開催するかどうかは別として、委員の皆様のお知恵を拝借したいと考えている。

(森委員)

- ・今津干潟における具体的な取り組みをうかがいたい。

(事務局)

- ・資料1-3の戦略本編p30にも例示しているように、今津干潟はカブトガニの産卵地となっており、地域の資源として地元にもよく知られ、保全活動も行われてきている。干潟の状況は年数を経るうちに産卵地に適した砂が減るなど状況が変化してきており、この活動を行政として支援するため、「今津干潟カブトガニ産卵場整備事業」や大学等と共働した「里海保全再生事業」などを実施している。

(事務局)

- ・行政主導を進めると地元住民が参加しにくいいため、地元の要望を汲み取りながら、カキ礁の管理や砂の流出防止のための竹粗朶柵づくり、ゴミ拾いなどを、地元主体として、市民と一緒に取り組んでおり、干潟がきれいになってきたという声も聞こえてきている。今後も、カキ礁拾いやアマモの移植など、地元の人の意見を参考に、地元主体で行っていく予定である。

(森委員)

- ・カブトガニだけでは生物多様性とは言えないと思ったので、色々な活動をしていることが分かった。

(矢原委員)

- ・今津干潟懇話会の座長をやっていて、まずは現状認識を固めるための調査を行った。地元からは浚渫をしてほしいという要望が多いが、今津干潟の現状として、一度大きな台風がきて埋まったことと、瑞梅寺ダムができてから砂が堆積している。そのため、効果的な浚渫方法を検討している。
- ・今津干潟は、河川でも海でもない公有水面であることから、管轄が不明確であるため、福岡市としても予算を確保することが難しい。

(小野委員)

- ・今津干潟では、地元の人がワークショップを重ね、長い期間かけて、住民の方も本格的に動き始めた。  
(矢原委員)
- ・まずはカキ礁を除去し、効果を見ようという段階である。  
(事務局) 藤本部長
- ・今津干潟は一般海域であるが、港湾局や下水道局が管轄しているわけではない。  
(荒井委員)
- ・小規模な浚渫を行っても効果が低いのではないかと。  
(矢原委員)
- ・カキ礁の除去は行って見た方がよいと考えている。  
(小野委員)
- ・まずは人の手でやってみることだと思う。  
(矢原委員)
- ・カブトガニの産卵場所への砂入れはこれまでも行ってきたが、砂が溜まる構造をつくらないと、うまくいかないと思う。

### 3. その他

(環境局長)

- ・平成 23 年 3 月から 24 年 5 月の期間、実質 1 年かけて本戦略の協議を進めてきた。
- ・策定を進める中で、本市の個性や魅力が生物多様性に支えられてきたことがわかり、その一方で、人々の暮らしや社会の状況によって生物多様性の恵みが低下傾向にあることがわかってきた。このような豊かな恵みを持続的に享受するためにも、本戦略を策定するに至った。
- ・本戦略の目標を実現するためには、人々の意識と行動が必要となる。
- ・人々の意識に働きかけ、行動を起こさせる契機となるような、わかりやすい広報を行っていきたいと考えている。
- ・平成 24 年度からは、アイランドシティの野鳥公園の整備構想を環境局が進める予定である。
- ・自然環境の再生、人と生き物の共存をテーマに掲げ、野鳥公園の整備を進めていきたいと考えている。
- ・委員の皆様には、今後も引き続き、本市の自然環境を維持していくためのご意見をいただければと考えている。
- ・本委員会は今回で最後となるが、委員の皆様の考えを事務局が受け継ぎながら、施策や指標の検討を進めてまいりたいと考えている。
- ・委員の皆様には、ご多忙の中、6 回にわたる本委員会に出席いただき、厚く御礼申し上げます。  
(浅野委員長)
- ・充実した内容の戦略ができたと思う。
- ・まずは、「生物多様性」という言葉を社会に定着させるため、たくさんの場所と機会で、「生物多様性」という言葉を使っていたきたい。

以上